

## 本坊健次君を通して

### アメリカを見る

岡田 晟  
予科21-6  
航空5-4  
(札幌市)



#### 1) 鹿児島二中より陸士へ

本坊君はアメリカのロスアンゼルス育ちである。彼の父君は鹿児島出身である。

本坊酒造といえは、鹿児島では知らない人は居ない程有名な造り酒屋であるが、この本坊家の一族であった父君は若いときに渡米し、アメリカで家庭を持ち、そこで誕生したのが本坊健次君である。

息子の成長過程では是非郷里で教育を受けさせたいとの父親の希望に添って、彼は小学校を卒業すると鹿児島に帰り、鹿児島二中に入学することができた。そして4年生で陸士に合格したのであった。

#### 2) 陸士入校

本坊君は昭和19年3月、筆者岡田晟と同じ60期生として陸軍予科士官学校に入校した。彼の所属は第5中隊（伊吹隊）第10区隊、中隊長は鬼の神田泰三と恐れられていた陸士40期の少佐で平成4年6月迄お元気であった。区隊長は54期の平川弘司大尉で昭和50年8月に逝去されている。同区隊は41名で、筆者の従兄執印隆己も同区隊であった。

約1カ年の教育訓練の後、昭和20年2月兵科決定、航空一次になった本坊君は1月28日航空士官学校に先発分遣された。

航空の生徒2,976名の予科士官学校

卒業式は3月23日行われ、即日士官候補生に命ぜられた。3月27日陸軍航空士官学校の入校式。本坊君は第16中隊（武烈隊）第2区隊に配属される。区隊長は山脇大将の御子息山脇正文中尉56期であった。

航空一次の本坊君一行は6月18日伍長の階級に進み、7月25日満州における操縦訓練のため修武台（陸軍航空士官学校）を出発するが、彼ら第1梯団の乗船した輸送船は米空軍の空襲を受け、沈没、再編成後の第2梯団の第21中隊（飛龍隊）として再度海防艦で北朝鮮に上陸するが、ソ連の参戦により襲撃を受け目的地の鎮東、鎮西の飛行場迄到達できず、8月15日日本無条件降伏の日を迎え、17日平壤より反転帰国し、修武台に24日帰着、8月25日復員式を行い解散となる。

#### 3) 渡米

本坊君は復員後は一旦鹿児島に帰るも、全市丸焼けの中では生活するのもままならない状態であったので、米国の父君の許に帰るための手続きを取った。やっとの思いでビザを手に入れ、新潟港から戦災地を跡にして長い航海の末ロスアンゼルスに辿りついた。港に着いた折には煌々たる輝きに満ちた戦勝国の華やかな都会を見て、彼はあまりの格差に驚きのため息も出なかったと言う。

然し、敗戦国からの日系人の帰国を周囲の人は暖かく迎え入れてくれたものか、ご本人から聞く機会もなかったが、複雑な心境ではなかったかと推測される。

#### 4) 兵役

アメリカに帰国して市民に戻った本坊君に待っていたのは徴兵であった。1950年（昭和25年）6月突如として朝鮮戦争が勃発した。ソ連の支援のもと北朝鮮を支配する金日成軍は忽ちにして1948年に成立したばかりの大韓民国軍を蹂躪し、釜

山手前まで侵攻してきた。

連合軍総司令官マッカーサー元帥は威信にかけても反撃するに決し、日本駐留の米軍を主力として一大攻勢に転じたのであった。そしてその後詰めに本国から招集した新編成部隊を増派する事になった。本坊君はカリフォルニア州のキャンプ・ドレークに集結し編成されてきた。

日本に着いたら、そこは何と旧陸軍予科士官学校の振武台であった。彼は振武台に2度入校・入隊したのである。

#### 5) 朝鮮戦争

本坊君は日本語が出来ることから朝鮮の第一線に送られることなく、沖縄の兵站基地勤務となった。各種の兵器、資材、糧食、日用品等の多くの物資を前線に補給する任務である。反撃後、国連軍は一旦は豆満江の線近くまで追撃戦を行ったが、1949年10月に成立していた中華人民共和国は、直接中国軍としては戦争に参加せず、義勇軍の名の下に正規の軍隊を増援してきたのであった。

後年旧満州国を訪問した筆者は、同徳台（満州国軍官学校）を案内してもらった軍官学校6期の同期生の満人より、私は当時義勇軍の聯隊長でしたと言われた、それは少し上級職過ぎるのではないかと尋ねたところ、こちらの聯隊長は日本で言う中隊長の事で、大激戦を繰り返し行ったが山砲だった為、命だけは助かった次第です。然し、ソ連兵は救援に入らず全くずるい。中共の義勇軍は本当に命を投げ出す覚悟で米軍と戦った。考えてみると朝鮮戦争は旧日本の陸士で学んだ者が、敵味方に分かれて死闘を行ったのだから、運命とはどこでどうなるのか、全く予想のつかないものです、と話してくれたことを思い出す。

これに対し本坊君の話では、第一線にも屢々補給に行ったが、毎日15時になると第一線の兵隊までアイスクリームを支給し

た。これには何とも言えない国力の違いとか、末端まで平等に大切にするという姿勢に驚歎した、と述懐されていた。

結局、この米ソの代理戦争は、ドイツの東西分断政争のヨーロッパと同様、朝鮮半島での両勢力に対し、朝鮮民族としては何も統一出来ないまま今日に及んでいる哀れな現状である。

米兵としての本坊君の復員帰国については詳細を聞いていないままになっている。もっと知りたいと思うが残念である。

#### 6) アメリカでの生活

本坊君は、戦後アメリカでは園芸の仕事をされていた様である。そして日系婦人と結婚され一男一女の子供さんが居られたと記憶する。

アメリカの教育について、中等高等の進学では白人7、黄色人種2、黒人1の比率が守られているとの事である。社会の人種的優位構成は最初から決められているようであった。このようなハンディキャップを原則とする当時のアメリカから今日の黒人系のオバマ氏が大統領に当選して全米のトップに立っているということは、あれから50年を経過してはいるが並大抵の事ではないと思われる。時代は少しずつ変化しているように見えるが、実は黒人の数が急速に増えている事を考えれば、将来のアメリカはどんなになるか予想もつかない。

アジア系黄色人種で見ると、中国、朝鮮、日本とあって、伸び悩んでいるのはどうしても日本系になる。例えばロスではリトルトーキョウという小集落があって、そこで小ぢんまりと仲よしクラブを運営しているのに対し、少数民族の朝鮮人は国道添いに列村を形成し、勢力の拡張に熱心なのは極めて深謀遠慮であると言わざるを得ない。

また支那人については古くよりチャイナタウンを作って独特の文化と集団を持って

きているが、今後の勢力拡張については注目すべきであろう。

ただ日系の強味は何といても勤勉さであって、ハワイで徐々にではあるが日系人の評判が高まり、米本土に良い影響を与えていると云われている。ロスに於いても少しずつ日系人に対して社会が開かれてゆき、尊敬される日系人の活動が認められてきていると思われる。

#### 7) 本坊君の現況

本坊君は日系アメリカ人として、誇りを持って堂々と活躍されて来られたが、ご夫人は糖尿病を患われ、数年前に他界された。本当に力落としの事と思われる。息子さんはシリコンバレーで別生活をされ、娘さんは婚家に行っている所以現在は一人暮らしである。一昨年暮「持病のゼンソクで体調を崩しております。」「皆様のご健康をお祈りいたします。」とのお便りを戴いたが、その後当方の便りに返信がないので、心配している。お元気になる事を祈りつつ、この拙文を終ります。

この写真は10年ほど前に本坊君がひょっこり札幌に尋ねてきてくれた時の写真で、苫小牧にいる藤井重義（5-10）を呼び出して家内と共に彼の歓迎会を開いた時の写真です。



藤井 本坊 岡田夫妻